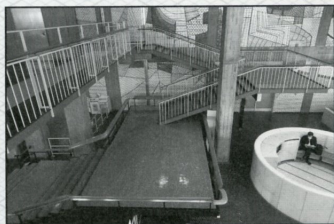


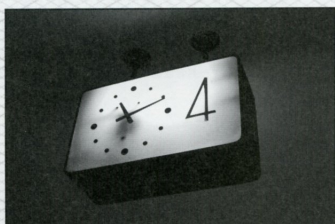


向かい側に横浜スタジアム（一九七八年）を手がける地元横浜の建築家・吉原慎一郎の創和建築設計事務所の五者だった。審査員には、早稲田大学教授の今井兼次と、戦前から横浜高等工業学校（現・横浜国立大学）の主任教授を務め、ボザール流の建築教育を実践していた建築家の中村順平が加わっていた。そして、五回に及ぶ審査会を経て、全員一致で、独創的な風格を有し、国際港都の市庁舎として、堂にふさわしいものと認める」として、村野藤吾案が入選と決定される。

村野はこのとき六十五歳。一九二九年に大阪に事務所を設立し、そごう百貨店（一九三三年）や宇都部市民館（一九三七年）、世界平和記念聖堂（一九五三年）など、すでに数多くの優れた建築を手がけた実績をもち、名古屋の丸栄百貨店（一九五三年）では日本建築学会賞を受賞、一九五五年に日本芸術院会員となる。しかし、その職人的な作風が戦後の合理主義と機能主義を求める時代風潮の中で疎まれたのか、一九五二年に行われた外務省庁舎、小倉市庁舎、東京都庁舎の公共建築の指名コンペでは、いづれもモダンな当選案を前に落選する憂き目を見ていた。そして、いまから振り返れば、半世紀に及ぶ息の長い設計活動の中で、村野が手がけた庁舎建築は、戦前の大庄町役場（一九三七年）と、戦後の横浜市庁舎と尼崎市庁舎（一九六二年）、最晩年の宝塚市庁舎（一九八〇年）のわずかに四件しかないことにも気づかされた。その意味で、横浜市庁舎には、村野の戦後復興期の公共建築に対する考えが刻まれている。同時に、機能主義と合理主義に貫かれた前川案など他のモダンな提案ではなく、村野の作風に共感した審査員の今井と中村の思いも託さ



市民ホールを見下ろす。辻晋堂の陶壁画とゆったりとした階段。



行政棟廊下のオリジナルデザインの時計。



網代状に床に張られた拍子木タイル。



行政棟の階段。握りやすい木製の手摺り。

れていたに違いない。村野は何を求めたのか。残念ながらこの市庁舎について触れた文章に残されていない。それでも、コンペ案に添付された粘土模型の写真から、世界平和記念聖堂の方法を継承したことがわかる。すなわち、上階へいくに従って先細りコンクリート打放しの柱と梁によるグリッドの構造体に、濃淡ある暗褐色タイルの外壁と網代張りの床タイルで落ち着いた質感を与えつつ、あえてランダムにバルコニーを配置することによって、単調さを乗り越えるリズム感と陰影のある表情豊かな外観を生み出したのだ。また、周囲に回廊を配した市民ホールには、辻晋堂作の泰山タイルを用いた大きな陶壁画と、ホテルのラウンジにあるようなステイジ状の踊り場をもつ優雅な階段が設置され、人々を優しく迎え入れる。そして、屋上には、市街地の三十四%を焼失した焦土の中で、戦後復興へ立ち向かう人々を見守り励ますかのように、魚網をモチーフにした優雅な鐘樓の塔が建てられた。

そこには、至近距離の横浜港沿いに建ち、被災したものの焼失を免れた戦前の三つの様式建築の名作「キングの塔」神奈川県庁舎（一九二八年）、「ジャックの塔」横浜市開港記念会館（一九一七年）、「グリーン」の塔」横浜税関（一九三四年）に連なることも意図されていたに違いない。こうして、村野は、歴史へ敬意を払いながら、時間の中で色あせることのない戦後の公共建築を目指したのだ。

横浜はどこへ向かうのだろう。巨大なIR（鉄合型リゾート）実現を目標に、前のめりで商業化へと突き進む中、村野と当時の人々が大切にしたい公共空間の姿を見つめ直すことが求められている。